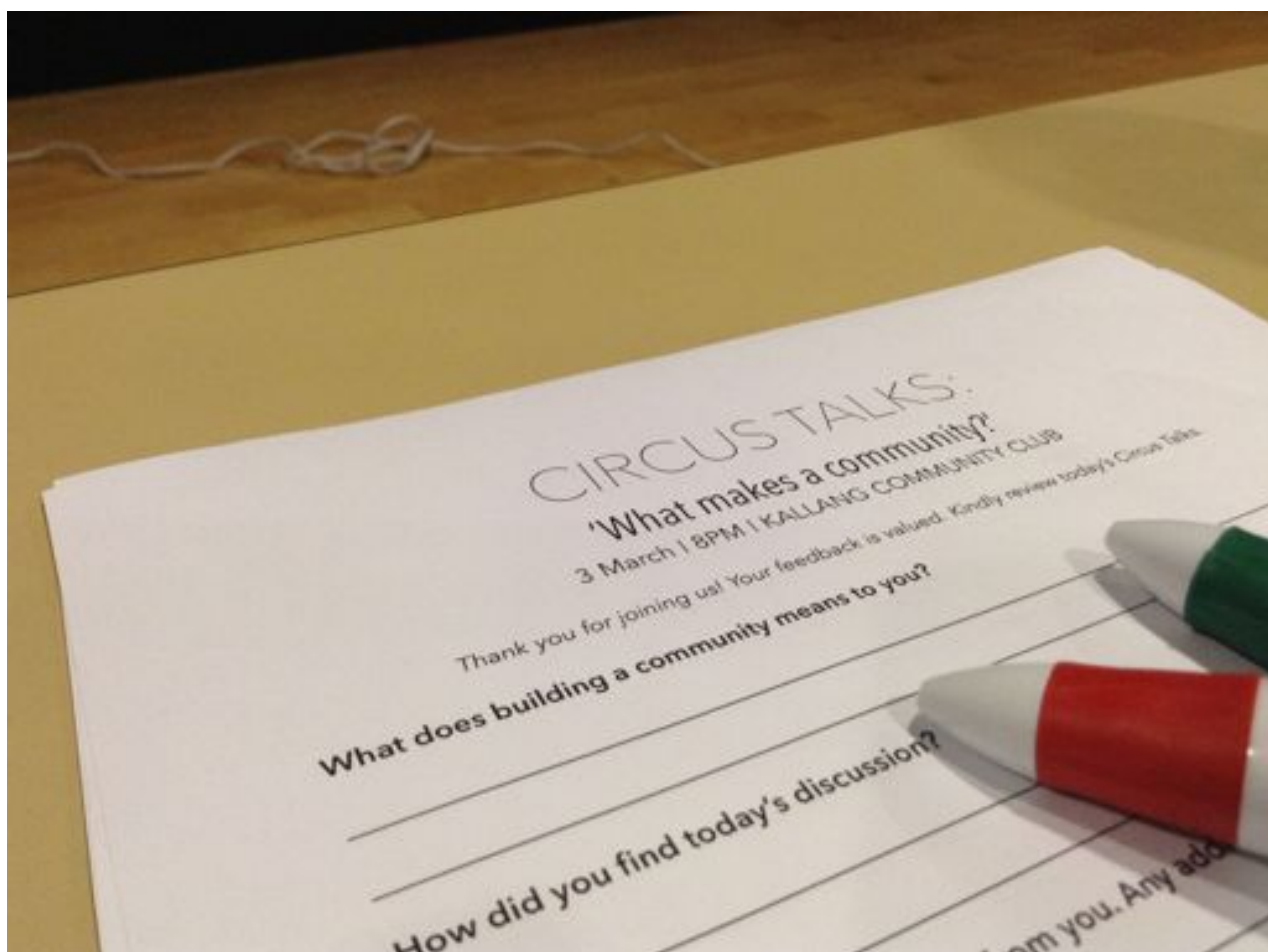


PONTE

書くジャグリングの雑誌：「ポンテ」

通巻第三号



撮影者：青木直哉 於CIRCUS TALK IN SINGAPORE

今号の記事

- ・編集長近況
- ・ピザとジャグリングの架け橋 ポンテ 未来のピザ回しはシガーボックス?! そいそい
- ・ジャグリングになにができるか? 山下耕平
- ・海外ジャグリング紀行(2) シンガポールで考えること。 青木直哉
- ・編集部より

編集長近況

諸事情でシンガポールより発刊。一応仕事で来ていますが、日課はジャグリングの練習と睡眠。ごはんが安くておいしい。やむやむ。

ピザとジャグリングの架け橋^{ポンテ} (2) 未来のピザ回しはシガーボックス？！

そいそい

自分はシガーボックスやシェイカーカップ、近年ではお皿回し、といった鳴り物系の道具にすごくシンパシーを感じてしまう。一見してピザ回しはこれらの道具とは真逆のように見えるがなぜ？それはある特質が関係している。つまり、道具の名前の具体性の高さだ。

シガーボックスは文字通り「葉巻の箱」でありシェイカーカップはコップ、お皿回しはお皿だ。ピザ回しもピザを回すものだ。認知度ではほかの道具にはまだまだ遠く及ばないが、しかし道具の名前の具体性の高さは通じるものがある。

僕が初めてシガーボックスを見たのはテレビを見ていた時。1997年から2000年まで放映されたTBSの『しあわせ家族計画』でダンディGOという大道芸人がデモンストレーションとして披露していた。コツン、コツンという小気味よい音も相まって、まるでカメラのシャッター音が被写体の一瞬を切り取るように、見る人の脳内でシガーの一技一技が鮮烈に記憶に残る。ボールをキャッチした時のポスッ、という音や、クラブのバシッ、という音とはまた違う、硬いものがまた他の硬いものとぶつかり合う鳴り物系独特の音である。子供のころはその独特な音とともに、スーツでばっちり決めたダンディなジャグラーがやるものという具体的なイメージが強く印象に残った。

それから十数年後の2013年、日本のジャグリングの祭典、JJF(Japan Juggling Festival)に初めて赴いた時、シガーボックスは子供のころ見ていたものとはまた違った様相を呈していた。従来の技術の体系に新しい系譜が加わり、自分が見ても理解できないものばかりになっており、技の継続時間を競うエンデュランス競技でシガーボックス
ジャグリングのことばのために

の番になった時に、会場の半面近くを占めるほど多くのシガーボックス使いが集ったのは特に印象的だった。今や、スポーツとしてのシガーはしっかりと日本に根を張っているように自分には見える。

この「葉巻の箱」に学ぶところは多い。この箱がジャグリング種目として浸透した歴史についてはその道の専門家に譲るとして、自分が特に注目しているのは、「名前の具体性を残したまま」かつ「その具体性に囚われない」スポーツとして発展していることである。今や葉巻の箱を扱っている、という意識はほとんどないのではないだろうか。

ピザ回しはその点では具体性の高さからまだまだ脱皮できてはいない。ピザ回し、と聞けば「ピザ職人が」「小麦でできた生地で」回すもの、という意識を多くの人は持つ（実際にメディアに出るのはこうしたいかにもなピザ職人が小麦の生地で回す人が主に取り上げられるし、その方が受けはいいのだが...）。自分もよくピザ職人に間違われるし、周りからはそうなった方が望ましい、という声もちらほら聞く。

こうした風潮に一石を投じる可能性を持つのが、前回もちらつと紹介したピザ回しを練習するためのゴム（シリコン）でできた生地・ラバーの存在である。



↑SpinningDoughというチェコ製の赤いラバーを回す筆者

この、「いかにも」から一步離れた位置にある道具の存在は様々な可能性を引き出してくれる。今までのラバーの使われ方は、主に小麦の生地を想定したものだった。それにより、ピザ回しのラバーだけが持つ可能性は限定されていた。そのラバーのいいところは、耐久性が高い、ということと伸び縮みしない、ということ。さらには色の種類の豊富さやそれぞれのラバーで特有の柔らかさがあることも見逃せない。ラバーでならガシガシぶん回し

でも破けないし、小麦の生地の耐久力ではなかなか出せないスピードも引き出せる。そして何よりピザ職人でなくても回す意義のあるものである。

この点ではシガーボックスも同様なのではないだろうか。正真正銘の葉巻の箱だけを扱っていたらきっと今のレベルには至っていなかっただろうし、ただの葉巻の箱であり続けたのかもしれない。葉巻の入らない箱が出たからこそ、シガラーは葉巻に囚われることなく、箱として扱う練習に励むことができたのである。実際、関東シガーボックス練習会の略称は『関シガ』ではなく『関箱』である。シガーボックスは葉巻の箱でありながら葉巻の箱だけではない、一つ上の抽象化された次元にある道具なのだと思ふ。

未来のピザ回しは、シガーのように抽象化されたものになるのだろうか。それについては「イエスであり、ノーでもある」という自分なりの意見をここに提示して次回か次々回かに書いていきたい。 ■

編集長より

シガーボックスとピザの比較というのはなかなか面白い着眼点。今度は、この文章の延長もよし、「相違点」についても考えてみるのもいいかもしれない。「箱」には普遍性がある。ピザは、少なくともいまのような形状はあまり一般的ではない。居酒屋のキャッチの兄ちゃんがメニューを回しているのは、よく見るが。

ジャグリングになにができるか？

山下耕平

目次

JJFCSにみるジャグリングの可能性

道具からモノへ

「道具の新しい使い方」の発見とは何か？

なぜ「道具の新しい使い方」がウケるのか？

「モノの新しい使い方」とは？

「モノの新しい使い方」は面白いのか？

ジャグラーにとって「モノの新しい使い方」とは？

「モノの扱い方」の最前線としてのジャグリング

おわりに

JJFCSにみるジャグリングの可能性

ジャパンジャグリングフェスティバル チャンピオンシップ (JJFCS) は現状では、日本のアマチュアジャグリング業界で最大かつレベル的にも最高の大会であるということになっている。そこで評価されているもの＝観客である日本のジャグラーたちが熱狂しているものはどのような種類のジャグリングだろうか？

最近のJJFCSで最も盛り上がるもの、評価されているものの、見たいと望まれているもの、は割合に単純な言葉で表せるのではないか。それはおそらく、「道具の新しい使い方」の提示だ。JJFCSの観客であるジャグラーたちは何よりもある道具の「全く新しい見たことがないような使い方」を見ることを切望し、それを見て熱狂する。彼らは「演者のかっこよさ」よりも「操られる道具の動きの美しさ」よりも「演技全体を作品とみたときの完成度」よりも、さらに突っ込んで言ってしまう「どれだけ上手いか」「どれだけすごいのか」よりも「道具の新しい使い方をどれだけ魅力的に提示してくるか」をこそ基準にして興奮しているような印象がある。勿論「道具の使い方」以外の要素も決して無視されはしないし評価されてはいるのだが、どこか最も望まれているものではないような雰囲気があるのだ。

ただし、単純に「上手さよりも新しさが大事」ということではないようにも感じる。そこには本当の新しきは

上手いからこそ生み出せる、というような意識があるのではないか。ただただ新しさのみを追求するばかりで従来の使い方に熟達していない者は、評価されにくい傾向がある。「上手さ」の先にある「新しさ」をこそ評価する。そんな発想があるからこそ「新しい使い方」が他の要素よりも高く評価されるような状況が存在しているようにもおもわれる。

この、JJFCSで「観客（＝ジャグラー）がジャグリング道具の新たな使い方を見て熱狂する」という構図、ここには一つ、今後へとつながるジャグリングの可能性を見出すことができるのではないだろうか。

道具からモノへ

少し考えを飛躍させてみる。今述べた「観客（＝ジャグラー）がジャグリング道具の新たな使い方を見て楽しむ」という構図、この構図をこのように変化させることはできないだろうか？「ジャグラー」を「生活者」（様々な日常生活を営む人たち、すなわちジャグラーをも含む人びと一般）に、「ジャグリング道具」を「日常のモノ」（僕たちが普段使っている色々な道具・器具）に。

すなわち「観客（＝生活者）が日常のモノの新たな使い方を見て楽しむ」という構図。

もし、このような構図が実現可能であるならば、ジャグリングは誰もが楽しむことのできる芸術／エンターテインメントのジャンルとして世の中に市民権を得ることができるに違いない。ここに僕はジャグリングの可能性を見出したい。

分かりにくいと思うのでもう少し詳しくみていこう。

まずは現状の構図「観客（＝ジャグラー）がジャグリング道具の新たな使い方を見て楽しむ」について、道具の新たな使い方とは何か？それはなぜ楽しめるのか？の二点について考えてみる。それから僕の想定する未来の構図「観客（＝生活者）が日常のモノの新たな使い方を見て楽しむ」についても、モノの新たな使い方とは何か？それは楽しめるのか？の二点を考えてみたい。そして最後に未来の構図において狭義のジャグリングを楽しむジャグラーはどうなるのか、についても述べる。

「道具の新しい使い方」の発見とは何か？

「道具の新しい使い方」とは一体なんなのか。それはすでにあるジャグリング道具のその形状や性質を新たに発見直すことではないか。例えばリングに関して考えてみる。

リングは従来、投げるための形であるとして捉えられてきた。その平べったく丸い形はいくつもの個数を投げるのに適した形状であると思われてきた。しかし、ある時ある人がリングを背中に転がすという技術を思いつく。物を拾う時のようにかがんだ姿勢のまま、右手で肩からリングを背中に転がして腰のあたりで左手でキャッチする。これを三個のリングで。この使い方があみ出された時に、「リングは体に沿わして転がすことのできる形」なんだ！投げやすい形というだけではないんだ！という発見がなされる。

道具の新しい使い方・操り方を発見するということは、道具の形状・性質を新たな側面から見つけ直すということなのだ。そのような発見がなされることで道具への見方や触れ方が一変する。道具自体の形に変化はないのに、その使い方が従来とは全く異なったものになってしまう、ということもありうる。

そんな劇的な変化がJJFCSでは毎年のように起こっており、その変化を目の当たりにすることで会場は大きな盛り上がりを見せるのだろう。去年のJJFCSでいえば、デビルスティックやシガーボックスなどが典型的にそれに該当する。

なぜ「道具の新しい使い方」がウケるのか？

このような「道具の新しい使い方」が観客（＝ジャグラーたち）にウケるのは一体なぜか。ジャグリングをよく知らない人から見ればあのJJFCSでの盛り上がりはワケのわからないものに映るだろう、というのはよく言われることでもある。

大前提として存在しているのは、ジャグラーが皆ある程度は諸々のジャグリング道具の（従来の）使い方を知っているという状況である。従来の使い方を知らないければ、何が「新しい使い方」なのかはさっぱりわからないだろう。デビルスティックやシガーボックスに関して、どのような扱い方が存在しているのかを皆が大まかには知っているという環境。それはおそらくジャグリングサー

クルなどでの仲間に様々な道具を使っている者がいるからであり、YouTubeで色々な人の動画を見ることができからでもあるだろう。そのような背景があつてはじめてJJFCSでのあの熱狂に多くのジャグラーが参加できる。

しかし、自分が扱ったことの道具はいまひとつわからないというのもまた間違いない。やはり自分が練習している道具・扱ったことのある道具に対してこそ最も熱くなれる。それは当然だ。ある道具の扱いを練習しているということは「この道具はどうやって使うのか」「この道具でどんなことができるのか」を身体で探りつづけているということだ。熱心なジャグラーであれば半日常的に（ジャグリングをしてない時できえ！）「あの道具でどんなことができるのか」と考えていることもあるかもしれない。

「この道具にはどんな使い方があるのだろうか？」という使い方への意識、それをもともとジャグラーは持っている。だからこそ、「新しい使い方」を見た時に彼らは「そんな使い方あったのか！ 思いつかなかった！」とか「その使い方極めたらそんなことになるのかよ、気付かなかった！」というような感慨を抱くのだ。「道具をどのように使うか」の意識が普段からあるからこそ、道具の新しい使い方にも敏感になり、興奮もできるということだろう。

「モノの新しい使い方」とは？

「日常のモノの新しい使い方」とは何か？ 先ほど「道具の新しい使い方」を考えた時に、それは「すでにあるジャグリング道具のその形状や性質を新たに発見し直すこと」だと書いた。これに従って言えば「すでにある日常のモノ（生活用品）のその形状や性質を新たに発見しなおすこと」が「日常のモノの新しい使い方」の提示だ。

本来の使用法以外の方法でモノを扱う。そのような「新しい使い方」は世の中にありふれている。ジャグリングに近い例でいえばペン回しなどがそうだろう。音楽の世界ではノコギリで音を鳴らしたりしている。推理小説などでの密室トリック（あんなものをそんな風にするなんて！）などもそんな例にあげていいかもしれない。そんな変な例をあげずとも、節約術だとか生活の知恵だ

とかだつてそうだろう。外で遊びまわる子どもたちはどんなものでもおもちゃだったり武器だったりにしてしまう。

そんなありふれた「新しい使い方」の提示だが、ジャグラーにはジャグラーなりの発見の仕方があるのではないだろうか。ジャグリング道具に対して、その使い方を模索するように生活用品の使い方を模索するというあり方。ヤカンはお湯をわかすのに最適な形をしているけれども、しかしこの形は別の使い方にも適しているのではないだろうか？ そんな、モノの形状に則した探求。ジャグリング道具の使い方に対して貪欲なジャグラーたちだが、自分の身の回りにある生活用品の使い方に対して積極的になつても良いのではないかと思う。

そんな方法で発見された「モノの新たな使い方」「モノの新たな形状や性質」、それを世の中に発信していくということはどういうことか。それは与えられたモノを与えられたまま享受するのではない、創造的な生活だ。それはもの自体を変えたり増やしたりすることをしなくても生活を豊かにすることができるのかもしれない。あるいは、それはデザインの補完であり裏側とも言える。ものをどうつくるかというのがデザインであるとすれば、つくられたものをどう使うかというデザインの裏側の活動。

いささか耳に心地よい(?)類の題目的な言葉を並べてみたが、決して冗談のつもりではない。このような広義のジャグリング、ジャグリングの延長上にある「モノの使い方」の探求には世の中に受け入れられるニーズがあるのではないか。デザインやキャッチコピーがごく普通に生活する人々にも身近になっている時代なのだから。

「モノの新しい使い方」は面白いのか？

では果たして「モノの新しい使い方」は面白いのか？ なんとなく役に立ちそうな気はしてきたけれど、何よりそれは見て楽しめるものでなければ仕方ないのではないか。「モノの使い方」を見ることなんて楽しいことなのか？

これに関してはやはり、観客側がいかにモノの使い方に対して自覚的であるか、すなわち普段から「モノをどのように使うか」を意識しているかどうか、によるので

はないかと思う。ジャグラーがジャグリング道具をいかに扱うかを意識しているように、生活用品をいかに扱うかを意識している人であれば「モノの新しい使い方」も楽しむことができる。こう書くと、かなり実現が難しいような気がしてくるが、そうでもないだろうと思う。

モノの扱いは人によって様々だ。傘の持ち方、箸の使い方、鞆の提げ方など、その扱い方には個人差がある。ここに一つのヒントがあるのではないか。普段意識していなくとも、モノの使い方は人によって違っているということ。それが話題になって会話が盛り上がることも日常には普通にありうるのではないか。であれば、モノの使い方を日常から意識していくということは実はそんなに大変なことではないような気もしてくるのだ。これはかなり楽観的な見方だろうが、しかし、すでにある日常のなかにそのようなきっかけが存在するのは確かだ。

ジャグラーにとって「モノの新しい使い方」とは？

今までジャグリング的営為の延長上にあるものとして「モノの新しい使い方」の提示を考えてきた。しかし、今現在ジャグリングを楽しむジャグラーからしてみれば、そんなものは自分たちのやっていることとは全然関係のない世界のことに思えてしまう。そうなのだろうか。

前半に見たようにジャグラーは、ジャグリング道具にどんな使い方があるのか、の探求を楽しんでいる。すくなくともそのような部分はあるのだと思う。そしてJJFCSのような場で彼らは「こんな使い方あったのか！」という興奮を味わっている。その楽しさと、日常のモノ・生活用品の新たな使い方を発見する楽しさとは、実は同じ種類の楽しみではないのだろうか。

ジャグリング道具への関心と同じような関心を、鞆の持ち方や、皿の洗いや、傘のさし方に持ってみてほしい。一度、だまされたと思って。何か難しい、高尚なことではない。単に、どんな持ち方の種類があるのか、とか左右の手での持ちかえの方法はどんなものがあるのか、を探るだけ。複数人でそれをゲーム感覚で探求してみた時、ジャグリングで味わうのと同じ楽しさを味わえるのではないか。そしてその感覚の先に「新しい使い方」への興奮・感動がきつとあるのだと思う。

「モノの扱い方」の最前線としてのジャグリング

「モノの使い方」を探る楽しさは分かったし、それがジャグリングの楽しさと通じているのも分かった。それでも僕らはあくまでジャグラーであるのだし、ボールを手放したくなどはない。そういう気持ちはどこまでいってもきつとある。「モノの使い方」を探求するという視点からみて、いわゆる狭義のジャグリング（今普通に僕たちがジャグリングと呼んでいる領域。ボールやディアボロやシガーボックスや...）は一体どんな位置づけになるのか。それは日常と関わりが無い故に無価値なつまらない遊びだとして見捨てられてしまうものなのか。

いや、きつとそうではないと思う。ジャグリングというのは、モノの扱い方の最前線・最前衛なのだ。ジャグリング用の道具とは「ある動作が最も行いやすいように設計されたモノ」あるいは「日常に存在するモノの特徴を抽象化したモノ」だとみなすことができる。例えば「投げる」という動作をなすため、そのために最も適した形を追求することで生まれた形。それがボールであり、リングであり、クラブなのではないか。それらは「点を」投げる、「面を」投げる、「線を」投げる、という分担があるために共存している。（勿論、現実にはそのような理想的な経緯でこれらの道具が生まれたわけではない、ということはずでに言われていることである。ジェイギリガンの言葉に従えばリングの形と大きさは台湾のクッキー缶のものであって、それが選ばれたのは単なる偶然でしかなかった。しかし、現在ではジャグリング道具には扱いやすいように改良が加えられているのは最早半ば当然で、未だ過程ではあれど理想的な形が追求されつつあるのは確かだろう。）

そして、「投げる」という動作は多くのモノに対して適用することのできるものだ。多くのモノに共通して適用できる使い方、その使い方を、抽象化された形状の道具（もつともその使い方をしやすい道具）でもって徹底的に追求するという営為。最も投げやすい形状であるがゆえに、「投げる」という動作に関する限界に挑戦する事が出来るのだ。そしてそのような限界への挑戦は「投げる」以外の動作についても、それぞれの道具によって行われている。これらの営為を指して「モノの扱い方」の最前線と呼ぶのは的外れではないと思う。これがいま

の日本のジャグリング界（JJFCS界限）がしていることだ。

こう考えてきた時、「ジャグリング道具」にふさわしいものはまだまだ数多く存在しているはずだ、との考えにも至る。ある動作を撰びだし、それに適した形状のモノをつくる。これだけで一つの道具が完成するのではないだろうか。新たな道具を創り出すならば形から考えるのではなく、動作から考えた方が良い。

そして、撰ばれた「ある動作」、それがどれだけの普遍性を持つか、どれだけのモノに適用可能な動作であるか。それがその道具の可能性になる。多くのものに適用可能な動作であれば、その道具で追求された「新たな使い方」もまたそれだけ多くのモノへと適用可能となる。最前線で開拓された可能性は日常のモノの使い方へと反映されていく。ジャグリング道具の「新たな使い方」の探求は、日常でのモノの「新たな使い方」探求の基盤となる。

理想的な構図はこのようなものだ。そこでは狭義のジャグリングにもまた十分に居場所がある。ボールを手放す必要などきつとない。

おわりに

「ジャグラーがジャグリング道具の新しい使い方に熱狂する」構図を「一般生活者が日常のモノの新しい使い方を楽しむ」構図へ変化させていく。というのが僕の希望観測的な未来予想の大きな見取り図だ。今の構図はどのようなものであるのか、その構図の変化はどのようにしたら為し得るのか、変化するとすれば変化の後はどうなるのか、それらを考えてきた。実際にそのような変化がおこるのならば、ジャグリングは一つの芸術／エンターテインメントジャンルとして確立されることだろう。それが僕の考えるジャグリングの可能性だ。

本論の目的は希望をもってジャグリングの未来を語ること。だからかなり楽観的に書いている部分がある。ただ僕自身はここに書いたようなことが実現可能な未来だと心底信じている。

内輪受け的な傾向とも受け取れるJJFCSのマニアックな熱狂具合は批判的にみられ語られることもある。しかし、僕はこの状況を否定するのではなく突き詰めることによ

てこそ未来が開けるのだと考えている。一番力をこめて言いたいポイントはその部分だ。ジャグリングの魅力は一樣なものではなく、魅力をどこに見出すかによって描きだされる未来像は異なってくるだろう。しかし「道具をいかに扱うか」という探求こそがジャグリングにしかない、他のジャンルでは購えない重要な魅力であるのは確かだと思う。未来はそこから切り開かれるべきだ。

あとがき

はじめまして。京都でジャグリングをしています山下耕平と申します。今回編集長青木くんに声をかけていただき、僕の方でも色々と考えておりましたので、一つ文章を書いてみました。

内容は「ジャグリングの可能性」です。とはいえしっかりと事実をもとに堅実な未来予想を書くようなものではありません。そうではなくて、今、日本の一人の学生ジャグラーに思い描くことができるジャグリングの未来、それを可能な限り肯定的に希望的観測をもって述べてみたい、というようなものでした。このような場にもものを書くような機会はなかなかないので、慣れない文章でしたがいかがでしたでしょうか。

今後、ジャグリングがどうなるか。自分たちの手でどんな風に変えていけるのか。そんな議論が活発化したら良いな、と思っています。PONTEの今後楽しみます。

筆者紹介

山下耕平

京都大道芸倶楽部JugglingDonuts所属。JJFチャンピオンシップ決勝出場。今年、仲間と共に「Juggling Unit ピントクル」を結成。5月に舞台公演「秘密基地」を予定。

<http://juggling-pintcle.com>

編集長より

山下君がこの雑誌のために書き下ろしてくれました。

こういう雑誌ならではの、「書く」ということを存分に使ってくれた、ジャグリングの新しい見方。興奮しました。動きから道具を考える、という発想、私の頭からはすっぱり抜け落ちていました。ジャグリングと、ジャグリングをしない人が結びつけられる、という意味で、「ポンテ」らしくてまた嬉しい。

私はまあ、「自分が楽しめるのがいい」というのが根本的な哲学で、社会的な意味など考えない質ですが、山下君が本気なら、これは新しい方向にジャグリングを導くのになかなかいいスズなんじゃないかと思えます。

こういう良質な「考える材料」を、どう「料理」するかということについても考えてみたくなってきた。皆様の反応も楽しみです。

海外ジャグリング紀行(2) シンガポールで考えること。

青木直哉

ヨーロッパのことについてまた書こうと思った。しかし現在、常夏のシンガポールに滞在しており、毎日黒い鳥の変な声で目覚めていて、どうもフィンランドで湖に飛び込んだ話とかができない。

というわけでアジアの話から始めようと思う。

アジアだと、ジャグリングといえば台湾が真っ先に浮かぶ。これは完全に筆者の個人的経験に由来するものである。どの国に行こうが、「ジャグリング」を指し狭まらずに観光ができないくらいジャグリング好きだから、自然と行ったことの多い国はそういうイメージになる。のだと思う。

それはさておき、客観的にも台湾はジャグリングの国だな、と思ってしまうのは、台湾ではディアボロが盛んで、学校教育にも取り入れられているからである。これを聞くと「西洋のものを取り入れた」という感じがする。しかしそうではなくて、中国に昔からある「空竹」というコマの、延長線上にあるものとして、伝統的スポーツといった体で受け入れられている。要するに中国ゴマである。中国ゴマがフランスその他ヨーロッパ各地における発展を経て、再び台湾に逆輸入された。と、勝手に思っている。正確な歴史はまだ知らない。興味のある方は「Planet Diabolo」というごく最近出たビデオでもその一端を見ることが出来るので、どうぞ。どなたか真剣にディアボロの歴史について調べ、書いてみたい方がいたら、すごく嬉しい。私は今のところそれに真剣に飛び込んでいく気がしない。

さて、まず台湾という国自体もあまり知られていないので、ここに私なりの説明を挟もう。

台湾は、日本の南方、中国大陸の東岸付近にある葉っぱのような形をした島。(ここがいつも意外で、なんとなく沖縄に近いかな、とか思ってしまうのだが、中国東岸の方がはるかに近い。)気候は温暖湿潤で、年中わりあい暖かい。夏はもうそれは蒸し暑い。雪も降らない。イタリア留学時代の友人リャンウェイ君が、人生20年

にして初めて雪を目にした時に「雪だるまの作り方を教えてくれ」とはしゃいでいたのを思い出す。

私はいつも台北にある桃園空港に着くと、「区役所みたいだな」と思う。日本の、30年くらい前に建てられた役所。少し古いにおいがする。設備も、なんとなく昭和感が漂う。街に出ても、新しいところは新しいし、立派な建物も多い。だが、随所に昭和感が漂う。日本統治時代の名残もあるのだろうと思う。台湾は、第二次世界大戦が終わるまでは日本が占領していた。それゆえ、いまだに日本文化の余韻がある。台湾の高齢者の中には、日本語を話す人も多い。このあたりは、私なりに色々見聞したところ、ポジティブに捉えられている場合もあり、一概に申し訳ないような気分になることはないが、単純に、興味がある。

とにかく今は、台湾に行くパスポートには「中華民国」というスタンプが押される。(「中華人民共和国」ではない、というところがミソである)主に使われている言語は、北京語(NHKの講座などで一般に「中国語」と呼ばれる言語)の台湾発音、である。表記に用いられる漢字は、現在中国語圏で幅広く使われている、画数の少ない簡体字ではなく、繁体字という、日本の少し古い文献でも目にするのできる、複雑な漢字だ。

よく質問されるのが、「台湾は何語?」というものだが、というわけで「中国語」といえばまあ正解である。その他に、「台湾語」という言語も、家庭などではところにより使われている。最も台湾語は皆話せるわけでもなく、中国語しか話せない人もいる。

さて、ディアボロの話である。私は、何度か台湾に行っている。もっとも首都の台北だけだが。今書いていて思い出したが、そのうちディアボロのコンペティションに参加するために行ったのは、最初から二番目の一回だけであった。

「台湾になぜそんなに行くのか」と聞かれて、「ディアボロのコンペティションがあるから」といつも答えていたが、ウソをついていた。台湾が好きだけだった。

だが行く度にディアボロと関係のあることをしているのもまた事実である。昨今多くのプレイヤーが使用しているシャオリン、サンバイリンで有名な「三鈴(SUNDIA)」には必ずといっていいほど訪れるし、現



上：SUNDIAの看板

下：ディアボロがぎっしりの店内

地の大学に行って、一緒にディアボロの練習をしたりもする。私の台湾のイメージのひとつがすでに「ディアボロの国」となりつつあるとも言える。ディアボロのことを考えずに台湾に滞在することはない。

最もこれが「ディアボロ」の国であって、「ジャグリング」の国ではないというところは、強調しておきたい。別にジャグリングが全く行われていないというわけではなく、単純にそういうイメージを持ちづらいのである。

たとえば国立台湾大学には、ジャグリングのクラブがある。台北体育大学でも、ジャグリングができる人、ハイレベルな技が出来る人がたくさんいる。

だが独自の「台湾スタイル」のようなものがあるかといったら、そうでもない。私が見落としているだけという可能性もあるが、独自のジャグリングを披露する人は、ほとんどいない。大きなジャグリングのコンベンション

もない。だから、台湾ではジャグリングが盛んだ、とは思えない。

「ジャグリングが盛ん」って一体なんだろう。そして私が「ジャグリングの国だなあ」と思うのは、いったい何を基準にしているのだろうか。レベルが高いということだろうか。ジャグリングを嗜む人の数が多いということだろうか。オリジナルなスタイルがあるということだろうか。

すくなくとも、フランス、ドイツ、は、ジャグリングの国だな、と思う。スウェーデンもジャグリングの国だな、と思う。これらは、サーカス学校があるということが大きく関係していると思う。

だがたとえばスロヴェニアは？と言われたら。私は、もちろんスロヴェニアにもジャグラーがいるのは知っているが、その具体的な実態はなにひとつ知らない。それで、自分でもすごく単純だな、と思うが、「スロヴェニアではジャグリングが盛んではない」のではないかという感想を持つのである。

つまり、「ジャグリングの国だな」と思えないのは、「私自身が知らない」ということが、最大の問題なのである。だがそれを一般的な話に拡張することもできて、つまり「認知されていない」ということが「ジャグリングしていない」と思われていることと、かぶっているのではないかと少し思う。

このことに気づくと、いかに自分が他の国のジャグリングの実態を知らないか、ということに、驚くとともに、わくわくする。いったい、YOUTUBEにも、EJCにもいない、見知らぬスロヴェニアのジャグラーが何人いるんだろう。どんなことをしているんだろう。どんなスタイルがあるんだろう。

こうして、アジアのジャグリングの実態も全然知らない自分に気づく。いったいカンボジアの人はジャグリングをしているのか。タイの人は？インドネシアの人は？韓国の人は？

すごくわくわくする。

ジャグリングが盛んであるとはどういうことか、ということについてもたくさん考える。ジャグリングのコミュニティって、どういうふうが発達するんだろう。

こういうことを考えているのは、ジャグリング発展途上国と言えるシンガポールに滞在していて、「コミュニティを育てるには」というホットな話題を日々提供されているからである。

現在March Workshop Series というイベントに参加しており、日本とはまた違ったジャグリングの「感じ」を目にしている。“What makes a community?” というテーマでディスカッションも開かれた。

March Workshop Series を主催するBornFireという団体は、コミュニティを拡げることにとっても前向きなのである。だから、彼らを助けたいなと思って、参考にしてもらうために日本のジャグリングの様相も色々と話した。日本でも、かつて皆ビデオで見た技をコピーしていた時期があって、だんだんオリジナルのものが生まれていったんだ、と。

だがここでまた考える。私は、なんだか日本とシンガポールの間で優劣の差を持ち込んでいるような気がする。どうも、それがひっかかる。君たちは発展していないんだよ、ということ、上からの立場で言っているような気分になることがある。

だからやっぱり、純粋にシンガポールのジャグリングの発展を見るのが面白いと思うのと同時に、自分が思う「ジャグリングの発展」とはいったいなんなんだろう、ということ整理してみたいと感じる。

だがとりあえず、国ごとに、その発展の様相が違って、それが「面白い」のだ、ということ、シンガポールに来て思った。 ■

編集部より

今号は寄稿が一人増えて、少しにぎやかになりました。いい兆しです。とはいえ、ここは青木が自分本位でやっている場でもあるので、寄稿があろうがなかろうが、とりあえず続いていきます。でも寄稿がいっぱいあって、意見がいっぱい交錯する場所であると、もっと楽しい。

ジャグリング紀行は、台湾について書くつもりが、ドリアンのにおいのする暖かい風と筆の勢いに運ばれて、結局シンガポールのことで終わりました。

あ、そういえば先号の発刊の前日にした演技について書くのを忘れていた。 ■

記事募集のお知らせ

寄稿を受け付けています。基本的にはこちらから声をかける場合が多いですが、「こんなものを書きたいぞ」という相談から、「こんなものを書いたぞ」という、引き返しの出来ない挑戦まで、なんでも下記のアドレスに連絡か、直接どうぞ。次号発刊は3月24日（月）寄稿締め切りは3月21日（金）23:59。 ■

jugglerna@gmail.com

ponte 編集長 青木直哉

次号予告

シンガポールの経験をまとめる予定です。寄稿もお待ちしています。 ■

ポンテは公式サイトでご覧になれます。

書くジャグリングの雑誌：ponte

<http://jugglingponte.tumblr.com>